

令和元年6月28日現在

機関番号：32616

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K20984

研究課題名(和文)日本語、韓国語、中国語学習が学習者に与える影響

研究課題名(英文) Effects of Learning Japanese, Korean and Chinese

研究代表者

齊藤 良子 (Saito, Ryoko)

国土館大学・政経学部・講師

研究者番号：50727055

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本の韓国語学習者及び中国語学習者、韓国及び中国、台湾の日本語学習者それぞれの言語学習経験が学習者に与える影響を明らかにすることを目的として、平成29年から平成30年にかけて日中韓で大規模調査を実施した。その結果、それぞれの言語学習者は目標言語、目標言語母語話者、目標言語使用国・地域に対してポジティブなイメージをもっていることが明らかになった。これは言語学習の影響によるものであると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で明らかした外国語学習が学習者に与える影響については従来の外国語教育研究ではあまり研究されていなかったため、言語教育により、目標言語、目標言語母語話者、目標言語使用国・地域のイメージがポジティブなものとなることを明らかにしたことは、学術的意義があるといえるだろう。また、日本における外国語教育のみならず、韓国・中国における日本語教育が学習者に与える影響を明らかにしたことにより、日本国内外の外国語教育の意義を発展させたことは社会的意義があるといえると思う。

研究成果の概要(英文)：This study reports on longitudinal research on Korean and Chinese learners in Japan and Japanese learners in South Korea and China/Taiwan conducted in 2017-2018, which aims at shedding light on effects that language learning experience has on language learners. It is observed that language learners have positive attitudes towards their target language, native speakers of the target language, and countries and areas in which the target language is spoken. This seems to result from the process of selecting a target language as well as from the language learning experience.

研究分野：外国語教育

キーワード：外国語教育 外国語学習動機 日本語教育 韓国語教育 中国語教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究に至った動機：本研究の申請者は韓国語学習者の学習態度の変容を中心に研究を行っている。その中で、学習経験の影響により、韓国語学習者の学習態度、行動、韓国、韓国人、韓国語に対するイメージ、学習者が描く未来像が変化したことを明らかにしてきた。具体的には、同じ年度の前期と後期の学習態度を比較し、韓国語を学ぶことによって韓国語だけでなく、韓国や韓国人のイメージが良くなること(齊藤,2011,2012a,2014a)、Dörnyei(2005)の「可能自己*」の側面からの研究により、学習者の描く未来像が韓国語と関連する社会や人と積極的に関わっていこうとする姿に変化したこと(齊藤,2013a)、実際に韓国に行く、自ら韓国文化に積極的に触れる等、実際の行動にも変化を及ぼしていることが示唆された。

また、この変化を成績の側面から分析したところ、成績の良い学習者もそうでない学習者も韓国文化や韓国人に興味をもつように変化していた。つまり、学習と直接関係のない部分における言語学習による影響は習熟度や達成度とはあまり関係がないことが示唆された。これらの研究成果から、韓国語学習でみられた変化、つまり、言語学習が学習者に与える影響は他の言語学習でもみられるのではないかと考えた。以上が研究開始当初の背景である。(* 「可能自己」とは学習者自身が描く未来の自分像の側面から外国語の学習態度をみた概念である。主に、目標言語(習得を目指している言語)を学ぶことを通じて、なりたい自分像、なりたくない自分像が含まれている。)

(2) 先行研究：外国語教育研究では、どのような要因が外国語学習に影響を与えるのかが様々な側面から研究されてきている。主な研究としては、学習動機研究(Gardner and Lambert(1959)や自己決定理論等)、臨界期仮説、学習意識研究(Horwitz;1987,2008)、学習戦略研究(Oxford,1999)、学習に対する好意度の影響をみた研究(齊藤,2009b,2012b,2014b)、学習態度と成績の関連をみた研究(齊藤,2009a)、家庭環境と英語力の関係をみた研究(寺沢,2009)等がある。そして、近年ではUshioda(1996, 2001)とDörnyei and Ottó(1998)の研究により、外国語学習における動機づけは安定したものではなく、学習体験や学習段階によって変化する動的なものとなされ、外国語学習における動機づけを動的にとらえた研究が行われており、これを基に申請者は学習経験による韓国語学習の動機づけの変化を明らかにした(齊藤,2013a,2013b)。これらの研究から学習動機が言語学習経験によって変化する、すなわち、言語学習体験が言語学習の動機づけに影響を与えていることが実証された。そこで、本研究では言語学習が学習者に与える影響について、日本と韓国、日本と中国で互いの言語を学んでいる学習者を対象として明らかにすることとした。

2. 研究の目的

上記の研究開始当初の背景から次の2つを本研究の目的とした。

近年、日韓・日中関係は悪化していると言われているが、大学における韓国語・中国語学習者の数は依然として多いことから、言語学習の影響をみることにより、関係改善の糸口がみつけれられるのではないかと考え、日本における韓国語学習、中国語学習の与える影響を明らかにする。

上記の目的で明らかになる結果が、日本人学習者特有の特徴なのか、日本人以外の学習者にもみられる普遍的な特徴なのかを明らかにし、さらに日本語教育が日本のイメージ形成や学習者にどのような影響をもたらしているのかを明らかにするために、韓国、中国、台湾で日本語学習の影響を明らかにする。なお、中国の調査は北京周辺の大学に加え、台湾でも実施する。これは、反日感情が強いと言われている韓国や中国だけでなく、親日派が多いと言われている台湾でも実施することにより、学習が行われている国や地域のもつ雰囲気によって学習経験の影響が異なるのかをみるためである。

本研究ではこれらを明らかにするために日韓、日中で互いの言語を学んでいる学習者を対象に調査を実施した。これにより、経済的結びつきが強く、人的交流も盛んであるにも関わらず関係悪化が懸念されている日中韓において、互いの言語を学ぶことがどのような影響を与えているのかを明らかにすることができ、さらに「外国語の知識を習得する/させる」こと以外の側面における外国語教育の意義を発展させることもできると考えた。

3. 研究の方法

(1) 調査対象者：日本の大学で韓国語および中国語を学んでいる学習者、韓国および中国・台湾の大学で日本語を学んでいる学習者を調査対象とした。これは多くの大学において必修科目とされている第二外国語の授業が大学生にどのような影響を与えているのかを明らかにするためである。そして、これらを明らかにすることによって大学における外国語教育の意義を再構築することにも貢献できると考えたためである。

(2) 調査時期：言語学習経験により、言語学習における可能自己および目標言語の言葉、人、国のイメージがどのように変化するのかを明らかにするために、同じ調査参加者を対象に、縦

断的に調査を実施した。調査はそれぞれ、学習（授業）が開始された月（以下「学習開始月調査」）、前期終了時に実施し（以下「前期終了時調査」）、日本のみ後期終了時にも実施した（以下「後期終了時調査」）。

（3）調査票：

イメージ調査票：言語学習者がもつ、目標言語のイメージ、目標言語母語話者のイメージ、目標言語使用国・地域のイメージ、つまり、目標言語の言葉、人、国のイメージとそれらの変化を明らかにするために、Osgood（1957）による SD（Semantic Differential）法を用いた質問紙調査法を用いて調査を実施した。調査項目については、田中（1969）の「国家人格」調査の項目や齊藤（2011）を基礎としたものを使用した。目標言語のイメージ調査票は30項目、目標言語母語話者のイメージ調査票は31項目、目標言語使用国・地域のイメージ調査票は31項目で構成されており、5段階尺度法を用いた。本研究では同じ調査項目によって、「学習開始月調査」ではそのイメージを、「前期終了時調査」および「後期終了時調査」では、学習を通じてどのようにイメージが変化したかを答えてもらった。

可能自己調査票：可能自己の質問紙調査には Dörnyei（2005）の The L2 Motivational Self System 理論に基づいた質問紙である Dörnyei with Taguchi（2010）と齊藤（2013b）を基礎としたものを使用した。調査項目は35項目で構成されており、5段階尺度法を用いた。本研究では同じ調査項目を用い、「学習開始月調査」では目標言語と英語に関する可能自己を、「前期終了時調査」および「後期終了時調査」では、学習を通じてどのように目標言語に関する可能自己が変化したのかを答えてもらった。

（4）分析方法：各項目の平均値と標準偏差の算出に加え、各調査結果の間の差を明らかにするために平均値の差の検定（t検定）を行い、5%以下の水準で統計的有意差をみた。

4. 研究成果

（1）調査時期と調査実施校：日本：2017年4月、7月、2017年12月～1月の計3回、東京および地方の国立大学および私立大学10校で実施 韓国：2017年3月、6月の計2回、ソウルおよび地方の国立大学および私立大学3校で実施。中国・台湾：2017年9月、12月の計2回、大連および台湾の国立大学2校で実施。

（2）調査参加者と分析対象者：

本研究では、日本の韓国語学習者と中国語学習を対象に、韓国および中国・台湾の日本語学習者を対象に調査を実施した。なお、日本での中国語学習者および中国・台湾での日本語学習者の調査については分析を終えていないため、ここでは詳細を省く。

調査1）日本の韓国語学習者を対象とした調査：調査参加者は全員日本の大学で第二外国語として初級韓国語を学んでる学習者であり、韓国（朝鮮）語専攻者は調査参加者に含まれていない。調査参加者の属性は次の通りである。総数：469名（男性127名、女性342名）、平均年齢：18.4歳、学年：1年生431名、2年生18名、3年生6名、4年生7名。このうち欠損値があるもの、留学生、年齢が50代の参加者等を除き次の参加者を分析対象とした。

分析対象者の詳細：総数：383名（男性97名、女性286名）、平均年齢：18.3歳、学年：1年生359名、2年生13名、3年生5名、4年生6名。韓国渡航歴：渡航経験がある79名、渡航経験がない304名、学習開始時期：この授業で初めて学ぶ320名、大学入学後24名、高校（浪人時代も含む）21名、中学校15名、小学校2名、小学校入学以前1名。

調査2）韓国の日本語学習者を対象とした調査：調査参加者は全員韓国の大学で初級日本語の授業を受講している学習者である。調査参加者の属性は次の通りである。総数：431名（男性191名、女性237名、不明3名）、平均年齢：20.0歳（かぞえ年で答えている可能性あり）、学年：1年生199名、2年生124名、3年生65名、4年生7名。このうち、回答に欠損値がある参加者、留学生、さらに、韓国の調査では日本語専攻者と非日本語専攻者の比較も行うため、日本語専攻者も調査対象としたが、専攻者の分析を終えていないため、本報告書では、非専攻者の調査結果についてのみ述べる。そのため、分析対象者から日本語専攻者111名、専攻不明者5名を除き、次の参加者を分析対象とした。

分析対象者の詳細：総数：242名（男性123名、女性119名）、平均年齢：20.3歳（かぞえ年で答えている可能性あり）、学年：1年生76名、2年生86名、3年生46名、4年生34名。日本渡航歴：渡航経験がある114名、渡航経験がない128名。学習開始時期：この授業で初めて学ぶ64名、大学入学後24名、高校（浪人時代も含む）76名、中学校72名、小学校5名、小学校入学以前1名。なお、調査参加者の3分の2以上が既修者である。

以下、「調査参加者」は、分析対象とした調査参加者を示す。

（3）分析結果：ここでは日本と韓国で実施した「学習開始月調査」のイメージ調査結果につ

いて述べる。なお、可能自己調査、前期終了時調査、後期終了時調査については現在分析中であるため、ここでは詳細は省く。

目標言語のイメージ：

・日本人韓国語学習者がもっている韓国語イメージ：

分析の結果、日本人学習者のみがもっている韓国語イメージは、きれいな、軽快な、速い、かっこいい、おしゃれな、評判のよい、であった。また、平均値が4以上であることから、日本人韓国語学習者は、韓国語は、好きな言葉、個性的な言葉、独特な言葉、楽しい言葉であると強く感じていることが明らかになった。

・韓国人日本語学習者がもっている日本語イメージ

分析の結果、韓国人学習者のみがもっている日本語イメージは、やわらかい、怖くない、であった。なお、平均値が4以上の項目は1つもなかった。これは、分析対象者の約3分の2以上が既修者であったため、すでに日本語に慣れ親しんでいることから、強いイメージをもっていない可能性があると考えられる。

・両者の比較から明らかになったこと

類似点) 日韓の学習者がもつそれぞれの言葉のイメージを比較した結果 30 項目中 23 項目で統計的有意差がみられた。差がみられた 23 項目中 12 項目は、同じイメージの傾向であるが、その強さの違いに差がみられた。このことから、その度合いに差があるものの、互いの言語を、なじみのある、丁寧な、良い、好き、可愛い、個性的な、独特な、人気のある、音がきれいな、調査地使用言語に似ている、英語に似ていない、役に立つ言葉であると考えていることが分かった。

相違点) 日韓で反対のイメージがみられたのは「強い・弱い」の項目であり、日本人は、韓国語を「強い」言葉であると思っており、韓国人は、日本語は「弱い」言葉であると思っていることが明らかになった。

・目標言語のイメージのまとめ：分析の結果、日本人学習者は韓国語に対して、視覚的に良いイメージ（きれいな、かっこいい、おしゃれな）をもっていることがわかった。これは、日本人韓国語学習者のほぼ全員が初修学習者であり、調査を実施した4月はハングル文字の練習を中心に行うため、視覚から得るイメージが強いと考えられる。一方、韓国人日本語学習者の場合、3分の2以上が既修者のため、強いイメージがない代わりに、悪いイメージをもっている学習者は、すでに学習から離れているのではないかと考えられる。

目標言語母語話者のイメージ：

・日本人韓国語学習者がもっている韓国人イメージ：

分析の結果、日本人学習者のみがもっている韓国語人イメージは、親しみやすい、日本人に似ている、積極的な、正義感が強い、親孝行な、情が厚い、感情的な、頑固な、気が強い、かっこいい、知的な、であった。また、平均値が4以上であることから、はっきりと言う人、親孝行な人、感情的な人、可愛い人、と強く感じていることが分かった。

・韓国人日本語学習者の日本人イメージ

分析の結果、韓国人学習者のみがもっている日本人イメージは、謙虚な、いい加減でない、慎重な、であった。また、平均値が4以上であることから、礼儀正しい人、謙虚な人、優しい人、と強く感じていることがわかった。

・両者の比較から明らかになったこと

類似点) 31 項目中 26 項目で統計的有意差がみられ、差がみられた 26 項目中 11 項目は、同じイメージの傾向であるが、その強さの違いに差がみられた。日韓ともに同じイメージは、明るい、礼儀正しい、真面目な、勤勉な、良い、優しい、可愛い、上下関係が厳しい、好き、であった。日韓で統計的有意差がみられず両者ともにもっているイメージは、社交的な、友好的な、近い、であった。

相違点) 「はっきりと言う・はっきりと言わない」と「声大きい・声小さい」の2項目において日韓で反対のイメージをもっており、日本人は、韓国人を「はっきり言う」「声大きい」人、韓国人は、日本人を「はっきりと言わない」「声小さい」人、であると思っていることが明らかになった。

・目標言語母語話者のイメージのまとめ：言語学習者は日韓ともに互いの母語話者に対してポジティブなイメージをもっていることがわかった。また、日本人学習者は韓国人に対して、パワフルなイメージ（積極的な、正義感が強い、気が強い）かっこいい、知的な、といったイメージをもっており、これらは韓国人アイドルの影響があるのではないかと考える。また、儒教

的なイメージ（親孝行な、情が厚い）親近感（親しみやすい、日本人に似ている）も持っていることがわかった。渡韓経験のある日本人韓国語学習者が少ないことから、韓国人イメージは芸能人や韓国人教師の影響を受けているのではないかと推測される。また、韓国人学習者の場合、約半数の調査参加者は日本への渡航経験があり、3分の2以上が既修者であるため、実際に日本で日本人に触れあった経験や日本人教師の影響が反映され、礼儀正しい、謙虚な、優しい、と感じているのではないかと考える。

目標言語使用国・地域のイメージ：

・日本人韓国語学習者がもっている韓国イメージ：

分析の結果、日本人学習者のみももっている韓国イメージは、情熱的な、理解しやすい、民主的な、活気がある、団結力が強い、カッコいい、強い、であった。また、平均値が4以上であることから、日本人韓国語学習者は、韓国は、愛国心が強い国、好きな国、可愛い国、おしゃれな国、近い国であると強く思っていることが明らかになった。

・韓国人日本語学習者がもっている日本イメージ

分析の結果、韓国人学習者のみももっている日本イメージは、怖くない、秩序を守る、のんびりした、であった。また、平均値が4以上であることから、韓国人日本語学習者は、日本は、秩序を守る国、可愛い国、伝統的な国、近い国、先進的な国であると強く思っていることが明らかになった。

・両者の比較から明らかになったこと

類似点）日韓の学習者がもつそれぞれの国のイメージを比較したところ、31項目中24項目で統計的有意差がみられたことから、互いのイメージには差があることが明らかになった。しかし、差がみられた24項目中11項目は、同じイメージの傾向であり、統計的有意差がみられなかった項目、つまり同じイメージである項目が11項目であることから、互いの国のイメージは、強さの違いはあるものの、その多くは同じ傾向であることがわかった。なお、日韓共にももっている互いの国のイメージは、豊かな、愛国心が強い、上下関係が厳しい、好き、おしゃれな、伝統的な、国際的な、なじみのある、近い、楽しい、先進的なイメージであった。また、日韓で統計的有意差はみられず、両者ともにももっていることが明らかにされたイメージは近代的な、可愛い、良いであった。

相違点）目標言語使用国・地域のイメージにおいて、日韓で反対のイメージを示した項目はなかった。

・目標言語使用国・地域イメージのまとめ：

言語学習者は日韓ともに互いの目標言語使用国・地域に対してポジティブなイメージをもっていることがわかった。日本人学習者は韓国に対してパワフルなイメージ（情熱的な、活気がある、団結力が強い、強い）をもっている。また、「カッコいい」イメージもあることから、韓国の男性グループアイドルの影響が強いのではないかと考える。一方、韓国人学習者は、日本に対して優しい（怖くない、秩序を守る、のんびりした）イメージをもっている。これは、韓国人日本語学習者の来日経験が影響しているのではないかと考える。また、日韓で反対のイメージを示す項目がなかったことから、互いの国のことを調査結果通り「近い国」であると考えていると思われる。

（４）まとめ

本研究の結果、日本人韓国語学習者、韓国人日本語学習者ともに、目標言語の母語話者、目標言語、目標言語使用国・地域に対してポジティブなイメージをもっていることが明らかになった。今回報告した調査結果は、学習開始1か月での調査であり、日本人学習者の場合、調査参加者のほぼ全員が初修学習者であり、渡韓経験者も少ないため、彼らのもつ韓国や韓国人イメージにおける韓国語学習の影響はあまり大きくないと考える。そのため、言語を学ぶだけでなく、言語の特徴、メディアを通して触れた母語話者、使用国・地域、その言語を学んで習得している自分の姿を考えながら「学ぶことを選択する」という過程にも、目標言語の母語話者や使用国・地域のイメージを良化する一定の作用があると考えられる。また、韓国人学習者の場合は、3分の2以上がすでに数年間日本語を学んできている既修者であり、さらに約半数に来日経験があるため、日本語学習や来日経験から総合的にイメージが形成されているのではないかと考えられる。

（５）今後の課題

本報告書ではすでに分析を終えている部分のみの報告となったが、今後は本申請課題によって実施した調査結果の分析を進めていきたいと考える。

〔雑誌論文〕(計 3 件)

齊藤良子(2019). 1904年から1906年に刊行された金島苔水の韓語学習書について 例言と目次からみられる学習書としての特徴と諺文の説明を中心に .外国語外国文化研究,29,33-52.

齊藤良子(2018). 明治38年刊『独修自在日語捷徑』の構成とハングルによる日本語の発音表記について. 韓日言語文化研究,22,109-130.

齊藤良子(2016). 初級韓国語学習経験における学習ビリーフの変化: 実際の変化と認知されている変化を中心に. 韓日言語文化研究,20,135-156.

〔学会発表〕(計 4 件)

齊藤良子(2019). 日本の韓国語学習者と韓国の日本語学習者がもつ目標言語話者と目標言語に対するイメージ比較. 国士舘大学外国語外国文化研究大会. (国士舘大学世田谷キャンパス)

齊藤明美・齊藤良子(2019). 韓国における日本語学習動機について—2017年に実施したアンケート調査の結果から—. 韓国日語教育学会20周年第35回国際学術大会. 明知専門大学(韓国)

齊藤良子(2017). 金島苔水の韓語学習書について. 第252回 朝鮮語研究会(東京大学).

齊藤良子(2016). 明治38年刊『独修自在日語捷徑』について. 韓国日語教育学会2016年度第30回学術大会. 明知専門大学(韓国).

〔図書〕(計 1 件)

齊藤良子(2018). 初級韓国語学習者の学習態度の変容に関する研究. ひつじ書房

6. 研究組織

(2) 研究協力者

本研究では調査を実施するため、日本、韓国、中国において多くの韓国語教師、中国語教師、日本語教師の皆さんにご協力いただいた。しかし、調査参加者の個人情報保護の観点から、研究協力者の氏名を明らかにすることができないが、ここに感謝の意を表す。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。